36 『延寿院切紙』における導道・三喜像

遠藤　次郎・中村　輝子

前回の一〇二回日本医史学会総会において小曽戸洋氏が『切紙東井御釈談』を紹介された。本書は初代曲直瀬道三による『切紙』をもとに二代目玄朔（東井、延寿院）が講義した折の講義録である。本書を検討する過程で、本書と近似した内容を有する筆写本『延寿院切紙』が京都大学富士川文庫に存在することが判明した。本発表では『延寿院切紙』に記されている初代道三の師匠、導道および田代三喜に関する記述を中心に検討を行ないたい。

本書の中で次の記述が注目された（数字は通行本『切紙』の該当する節の番号）。

（2）先賢トハ非聖賢人之儀、三喜ノ三代以前明監寺ト曰人、此一枚脈書ヲ記セリトテ今代三喜流ニ是ヲ用ル…、（3）（脈対分別之）捷径ハ一渓ノ作ニモアラズ、江春家ノ切紙也、然ルヲ今一渓ニ授ケラレタリ、爰エ入テ置ト也。此浮沈緊芤ト次第ニ相対スルコトハ大唐カラワタル書ニモ不見、此脈対ヲセラレタルハ天文ノ此ヂヤゾ、丹渓脈訣ノ不渡前ニ如此セラレタルワ奇特ノコトト皆イワレタゾ、（7）師君ハ三喜也、此一通ハ素カラ江春ノ家ニ伝テアリシ切紙也、…三喜ノ講釈ノ時心持ニ薬種ヲチョツチョツト被仰候、道三聞書シテソレヲ爰エ道三ノ書シルス也、（16-1）三喜ノ弟子…ガ聞書ヲ…今切紙ニ入ラレタソ、…一説ニハ此人ハ利陽ニテ道三ト同学セラレタゾ、導道ヨリ医ヲ学セラレタゾ、（16-2）師翁ハ三喜也、異ニハ導道トアリ、（24）儒道ヲバ文伯ト曰人ニ学也、医学ヲバ導道ニ学也、薬ノコト其外療治ノコトドモヲ委ク江春ノ家三喜ニ問ハレタゾ、（28）是関東ノ明監寺ノ渡唐シテ…。

（16-1）、（16-2）、（24）から、道三の医学上の師匠は導道と三喜で、両者は別人であること、（2）、（3）、（28）から、田代家（江春家）で明に渡ったのは三代前の明監寺であり、三喜は明に渡っていないことが理解された。演者らはすでに他の資料から、導道と三喜は別人で

あること、三喜は明に渡っていないことを報告したが、本書の記述はこれを裏付けた。

（2）、（7）から、両者の切紙は明監寺が著したことがわかる。一方、演者らが前回報告した「導道が道三の授けた印可状」によると、（2）、（7）の切紙は導道が著したことになっており、見解が一致しない。見方によっては導道、明監寺同一人物説が成り立つ。また、導道は（16-2）のように三喜と重ね合わされることも少なくない。

さらに本書には（16-1）、（24）に見られるような別な導道像が示されている。ここでは、導道は、道三が、足利学校で勤勉を共にした一鷗斎（西友鷗の子？）と共に医学を学んだときの師匠として登場している。（24）では当時の足利学校の庠主文伯と並記しているところから、導道も足利学校に関連した先生であったとみられる。（24）の中で、道三は、三喜からは薬のことや、その他具体的な治療のことを教わった、と記しているのに対し、導道からは単に「医学」を教わったと記している点が注目される。導道から教わった「医学」の内容は「導道から授かった印可状」と対比させると一層明瞭になる。すなわち、この中の六つの「唯授一人」の印可状には具体的な察証弁治に関することはほとんど記されておらず、治療する者の心構えや全体的な「察病」に関することに終始している。また、宗教用語や論語の引用が多いことから、これを授けた導道は実際の臨床家ではなく学者タイプの人であったと想定される。このように、本書の中にはいくつもの導道像が示されている。前回演者らが発表したように、「導道が道三に授けた印可状」そのものが道三により創られたものであることを考え合わせるならば、「導道」は「明に渡った明監寺、関東の名医田代三喜、足利学校の学者」の三者を一体化して、道三が創った架空上の人物と見るのが妥当であろう。

（東京理科大学薬学部　薬用植物・漢方研究室）